

特集にあたって

宇野 二郎

本特集は、札幌大学総合研究所の共同研究「課題解決型教育プログラムとしての「札幌学」の開発研究」(2012年10月～2014年9月)の成果となる各論文によって編集されたものである。この共同研究は、地方の私立文系大学がどのように地域に関わり、また、どのようにそれを教育の場で活用するべきなのかを考えることを目的に企画された。

札幌大学は、札幌市にキャンパスを構える私立文系大学である。多くの地方私立文系大学がそうであるように研究教育の中心は社会科学と人文学であり、必ずしも、職業に直接結びつく高度な専門技術を取り扱うわけではない。こうした地方の私立文系大学でのキャリア教育には、本来の専門分野から離れ、例えば「自己分析」から各自の将来への願いとその適性を見出させようとするものがありうるだろうが、地域社会の必要からアプローチすることも有効ではないだろうか。もちろんここでいう地域社会の必要は潜在的なものであってもよい。

こうした問題意識から、初年次の学生がこれからの大学での学修を体系化させる一つのきっかけとして、札幌という地域について考えてもらうこと考えた。それゆえ、各共同研究者には、初年次導入科目のイメージを念頭に、それぞれの専門分野から教材となりうる事例を取り上げてもらうこととした。

この共同研究で取り上げたテーマは、共同研究者の専門分野に限定されるため、文系というにもさらに狭い範囲からのものでしかない。それでも、いくつかの異なる分野から札幌という地域やそこで必要となる人材像について考え、また、札幌大学での教育実践例を紹介してみることは、初年次学生の学修の手助けになるのではないかと考えている。加えて、異なる分野からのアプローチを示すことで、月並みな言い方ではあるが、多様なものの見方を示してみたかった。

以下では、まず、経済学・会計学の分野からの二つの論文によって、札幌市の経済と財政の現状を分析した。

武者論文は、経済学の視点から札幌市を含む札幌圏の産業構造と人口構造の現状を検討した。それによれば、札幌圏は、人口193万人の札幌市を中心として近隣市町に広がり、約239万人の規模を持つ。この札幌圏の産業構造では、サービス業が中心であり、小規模

零細な食料品製造業が目立つことには目立つが、それ以外の製造業が少ないこと、また、こうした産業構造からか、道外へ流出する男性が多い一方で、道内他都市からの女性の流入が多く、20代から50代にかけての女性が相対的に多くなっている。

宮川論文は、札幌市の一般会計及び社会保障関連の特別会計の分析から、少子高齢化が進む札幌市の財政状況を分析した。人口減少が急ピッチで進む北海道内にあっても札幌市の人口は微増を続けていることから、人口減少や少子高齢化に対する危機感は薄いですが、札幌市でもやはり少子高齢化は着実に進行している。また、対個人のサービス業が中心の産業構造や高い離婚率もあり、生活保護費を中心とする民生費の高さが際立っている。さらに、年金や保険の会計も、将来世代に大きな負担をかける構造となっていることを指摘している。

こうした経済学・会計学的な分析に続いて、札幌が抱える政策課題のうちいくつかについて、次の四つの論文が扱っている。

第一に、観光に関する課題である。札幌市では、それまでの固定的なイメージを超えて、「札幌スイーツ」などの新しい札幌の魅力を発信し、海外からの旅行者を惹きつけようと努めている。こうした点に着目し、佐藤論文は、旅行者の送り出し先が創り出すイメージを、ガイドブックと旅行者によるブログ記事から検討している。ブログ記事の中には、札幌市も発信している新たなイメージに合致したのが見られるが、ガイドブックが固定的イメージを表しているという。発信者側とガイドブックとの間には、いわばイメージのギャップが存在する。では、どのようにしたら、それにも関わらず新たなイメージを創っていけるのか、そして、そのために英語を学ぶ学生がどのように関わっていけるのか。こうした問いが最後に考察されている。

それと関連して、第二に、札幌市における「地域ブランド化」とモノづくりに関する課題である。松友論文は、札幌の芸術やデザインという視点から札幌市の「地域ブランド」の歴史をまとめた。札幌市は、食品加工業を除くと第二次産業が弱いため、中小のモノづくり産業を支援するために始められたのが「札幌スタイル」事業であった。その際、歴史や自然ではなく、札幌の暮らしそのものが注目されたという点が興味深いだろう。松友論文には、机上で少数の専門家がブランドやイメージを創り出していくプロセスというよりは、製品開発やプロモーションをめぐって、組織間のつながりを創り出し、何かを創発していくというプロセスが描かれている。普段は意識することのないだろう、札幌での自分の暮らしを見つめ直し、その価値を誰かと共有していくことが大切に思えてくる。

第三に、暮らしにまつわる政策課題である。

まず、岩倉論文は、「動物との共生」をテーマに札幌市の動物愛護行政について論じて

いる。札幌市は190万人の人口を抱える大都市としては自然に恵まれた都市と言え、野生動物との共生のあり方も常に話題となる。とはいえ、私たちが、人間以外の動物に接するのは、やはりコンパニオンアニマルとさえ呼ばれるようになったペットたちとの関わりを通じてではなかろうか。しかし、そうした動物たちが都市の中を彷徨い、そして殺処分される現実も他方で存在している。岩倉論文は、札幌市で殺処分の減少してきた背景と、今後の課題を明らかにしている。札幌市民の動物愛護意識の変化が殺処分を減らしてきたという指摘は興味深い。動物との共生を担う人材育成もまた、寛容な社会には欠かせないだろう。

これに対して、武岡論文では、札幌の自治のあり方が検討されている。人びとが共に暮らす知恵としての自治がここではテーマである。武岡論文は、2003年から続いた上田市政の重要施策の一つであった「市民自治」の拠点である「まちづくりセンター」が創り出された経緯や課題を丹念に追っている。それによれば、積極的な「市民自治」施策に関わらず、やはり札幌市でも町内会への加入者数の減少に歯止めがかからない。武岡論文のポイントは、札幌市の自治を充実させるためには、市役所と町内会とのもたれ合いを強めることが重要なのではなく、自治団体としての町内会が自らの活動を活発化させていくことこそが重要だ、ということだろう。

最後に、札幌市を支える地域人材を念頭に置いた教育実践について、次の五つの論文が取り上げている。

まず、英語教育に関する論文である。「札幌市国際戦略プラン」(平成26年3月)を挙げざるまでもなく、札幌でもグローバル化への対応が必要になりつつある。英語コミュニケーション能力の向上は、高等教育機関である大学の課題であるとともに、地域における人材育成の課題でもあろう。そこで、對馬論文は、札幌大学に開設されている「TOEIC A」という授業科目を実践例としてTOEIC®指導について報告し、また、大川論文は、教員採用試験のための課外受験指導の実践を報告している。両論文とも、中学・高校でコミュニケーションを重視した英語教育が充実してきているその反面で、語彙や文法の知識が弱まっている傾向を指摘している点は興味深い。地に足を付けた地道な教育が求められているということであろうか。

さらに、飯田論文では、ロシア語に関する正課学習と正課外学習との連携の取組みを報告している。それによれば、正課でのロシア語学習に加えて、動機付けのための行事、短期・長期の留学、そして自主学習との有機的な連携が企図されているのだが、地域と大学の連携という観点からは、やはりボランティア通訳活動が欠かせない。飯田論文では、実際の経験から、ボランティア通訳活動の実施に際しては、受入機関と綿密に調整するなど

して学生に過重な負担を課さないように留意することが重要であること、つまり、ボランティア通訳活動のプログラム設計に際して教育効果を最優先に考慮すべきことを指摘している。

また、安田論文は、バレーボールを題材として、チームに共有されている試合中の心理状態に、チームメートの言葉がどのような影響をもたらしているのか、特に、北海道のチームの特徴を検討した。県民性という言葉もあるように、チームワークのやり方にも地域性はあるに違いない。バレーボールに限らず、チームワークを必要とする場面は地域での様々な活動の中に多くあることから、ここで明らかにされている北海道の学生たちの特性は、チームワークをこの地域で活性化させるための技法を豊かにするに違いない。

最後に、荒木論文は、学生の主体性を引き出す「アクティブ・ラーニング」の実践例として、高大連携事業における学生の参加、具体的には、S高校のスキー校外合宿の活動補助と夜間プログラムの自主運営の実践を報告している。主体性を引き出すためには、多くの人との関わりこそ鍵となることが、そのポイントであろう。社会の中には実に多様な見方が存在する。独りよがりの独白ではなく、他者を認めた対話こそ、地域では必要とされるのではないだろうか。

本来であれば、札幌という地域を考えるにあたって、もっと多くの分野から、そしてより深く検討することが望ましいだろう。しかし、バリエーションは少ないとはいえ、普段は札幌という地域を直接扱うことのない分野からも検討してみたことは、この共同研究の一つの意義であろう。共同研究者の一人ひとりの選んだテーマで書かれた論文を読むのは、よく知った土地の意外な面を知ること似て、研究代表者として楽しく、貴重な体験であった。支配的な、一つのものの見方に拘らずに、多様な視点から札幌という地域を学ぶということは、言うのは簡単だが、やってみると存外に難しいものだ。愚直にこうした試みを続け、より立体的に札幌という地域を描いていきたいと思う。